

文化

<朝刊>文化 囀 囀 <夕刊>文化・芸能 囀 囀 / 土曜カルチャー 田 / 科学 囀

被爆作家 原民喜研究のいま

<下>

2015年は原爆投下70年、原民喜の生誕100年に当たったため、民喜の作品に光を当てた出版や企画が相次いだ。雑誌「三田文学」の昨年夏月号は、約80頁にわたる「原民喜特集」を組み、多くの文学者が寄稿したほか、未発表の書簡や作品も掲載。詩人としての再評価も進み、岩波文庫から「原民喜全集」が刊行された。「長崎を舞台に原爆の悲劇を描いた映画『母と暮せば』では、坂本龍一が提供した曲の歌詞に民喜の『鎮魂歌』が引用された。昨年刊行され、書店員が選ぶ『本屋大賞2016』を受賞した宮下奈都『羊と鋼の森』にも代表作『夏の花』の一文が使われた。

広がる再評価の動き

誌のうちに、長い間所在が分からなかった直筆資料の発見が相次ぐ。

講談社(東京)の倉庫からは『鎮魂歌』など4作品の生原稿が見つかり、4月に民喜のおひの原時彦さんに返却された。このうち『魔のひととき』は、終戦直後に長光太の東京の家に居候していたころの様子を書いた作品。時彦さんは「長さんの存在がどんなに大きなものだったのかが伝わる」と話す。これらは広島市の平和記念資料館に寄託され、公開を予定している。

『夏の花』は文学作品としての評価に加え、原爆の被害を後世に伝える証言としても重要視されている。

7月末、広島市立中央図書館での講演会「原爆文学はどう生まれたか」。広島市出身の詩人・堀場清子さんが、占領軍の厳しい検閲の下、被爆の悲惨さを伝える文章を発表することがいかに困難だった

企画展や講演会 詩集刊行も

かを説明した。「夏の花」が「三田文学」に掲載されたのは1947年。小説の内容に心打たれた知人たちが、細心の注意を払って検閲を乗り越けたという。タイトルも当初は「原子爆弾」だったのを「夏の花」に変えた。堀場さんは「ジャーナリストも数年間、被爆の惨状を伝えることができなかった中、民喜が被爆から2年後に広島への悲劇を詳細に伝えたのは、大きな意味がある」と評価する。

広島市はまた、民喜が「夏の花」執筆に向い、原爆直後の様子を詳細に記録した手帳などの原爆文学資料を、国連教育科学文化機関(ユネスコ)の記憶遺産に登録するよう運動を続けている。同市の未定勝美・被爆体験継承担当課長は「原爆文学は国を超えて伝えるべき貴重な資料。民喜の書簡が発見されたのを縁に、北海道の人にも協力を呼びかけた」と話す。平和記念資料館での展示などさまざまな企画を通じ、全国的なうねりにつなげたい考えだ。

広島市立中央図書館は、昨年10月から11月にかけて「原民喜展」を開催。広島での青春時代や人物像にも光を当てた。「広島で被爆を経験した人たちの高齢化が進み、語り部は減少の一途。今後は原爆を伝える文学の重要性がさらに増すだろう」と同館事業課長との考えから、若い人も民喜の作品に触れてもらおうという狙いがあった。

今年に入っては、道立文学館で見つけた書簡や回覧雑

「原爆文学はどう生まれたか」をテーマにした講演会＝7月31日、広島市立中央図書館



「魔のひととき」の直筆原稿 (広島平和記念資料館蔵)

長崎で原爆をテーマに執筆を続けている芥川賞作家、青来有「一さん」は、原民喜の文学についてコメントを寄せてもらった。

原爆文学は民喜によって始まったと言ってもいい。1945年8月6日、広島で被爆した原民喜は、翌日には「突如、空襲一瞬ニシテ、全市街崩壊」と

「原爆被災時のノート」を書き始め、これをもとに代表作『夏の花』を書く。戦後の困窮のなかで、彼は目の被爆経験を凝視しながら小説を書き続け、「鎮魂

作品の本質は「愛」

歌」など一連の優れた作品を残した。原爆という特異な経験を深化し、極めて高度な文学を達成している。今後、原爆文学という枠組みからだけでなく、もっと普遍的な文学として読み直されていくのではないかと

一方、文学的な資質に恵まれながら、生活力は極めて乏しく、夫の才能を信じた妻の貞恵さんの支援が大きかったようだ。その妻を病で亡くして1年も過ぎ

ないうちに彼は被爆する。妻を失った無力感に加え、大きな失意と混乱のなか、彼は小説を書いていく。広島で被爆死した多くの人々の背後に妻の面影を求めているようでもあり、彼の文学の本質は「愛」なのではないかと思う。

戦後、原民喜と交流を深めた遠藤周作は「あの人の百倍も強烈なのが私にとってイエス(キリスト)かもしれない」とまで書いた。原民喜がどのような人だったのか、その資質と魅力が言い当てているかもしれない。

芥川賞作家・青来有「一さん」